






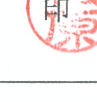


# 学位論文審査報告書

報告番号	北里大 甲 第 1211 号	氏 名	小田中 啓太
論文審査担当者	(主査) 北里大学教授 阿部 章夫  (副査) 北里大学教授 高橋 孝  (副査) 北里大学教授 岡田 信彦  (副査) 第一薬科大学教授 松原 大 		
<p>[論文題目]</p> <p>「百日咳菌が産生する物質の探索とその応用利用」</p> <p>[論文審査結果の要旨]</p> <p>本学位論文は、百日咳菌が菌体外に分泌する黄色物質の同定と作用機序の解析および新規診断用抗原の開発に関するものである。</p> <p>1. 百日咳菌が分泌する黄色物質の解析</p> <p>百日咳菌東浜株の培養上清から色素画分を抽出し黄色物質の同定を行なった結果、リボフラビンを同定した。菌体外に分泌されたリボフラビンは、百日咳菌の増殖ならびに宿主内での定着に関与することが示唆された。</p> <p>2. 百日咳菌の新規診断用抗原の開発</p> <p>百日咳菌の全菌体タンパク質を2次元電気泳動に展開し、百日咳患者血清が認識するタンパク質スポットを質量分析にて解析した。新規診断用抗原の候補として、GroEL, ATPシンターゼβサブユニット、ペプチジルプロリルシス-トランスイソメラーゼを同定した。</p> <p>審査の過程において、問題となった要点は2つある。すなわち、リボフラビンが百日咳菌の増殖や in vivo での定着にどのように関与するのかについては、リボフラビン生合成遺伝子の欠損株を作製して詳細に検証する必要がある。また、新規診断用抗原として候補にあがった上記タンパク質は様々な細菌に高度に保存されていることから、診断用抗原として使用することは難しいと考えられた。これらのことを踏まえて、審査委員が学位論文の訂正について指示を出し、動物実験の承認番号、研究倫理審査の承諾などを含む全ての項目が盛り込まれていることを確認した。よって、本審査委員会では、全会一致をもって提出された学位論文が博士（感染制御科学）の学位に値するという結論に達した。</p>			

## 最終試験結果報告書

報告番号	北里大 甲 第 1211 号	氏 名	小田中 啓太
論文審査担当者	<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: flex-start;"> <div style="width: 60%;"> <p>(主査) 北里大学教授</p> <p>(副査) 北里大学教授</p> <p>(副査) 北里大学教授</p> <p>(副査) 第一薬科大学教授</p> </div> <div style="width: 35%;"> <p>阿部 章夫</p> <p>高橋 孝</p> <p>岡田 信彦</p> <p>松原 大</p> </div> <div style="width: 5%; text-align: center;">        </div> </div>		
<p>[成績]</p> <p style="text-align: center;">合 格</p> <p>[試験結果の要旨]</p> <p>試験担当者は、小田中 啓太氏に対して、学位論文内容ならびに関連事項に関し試験を行った結果、合格と判定した。</p>			